1686

唐本賞罰仕作
和

饗庭文庫

序

鑛倉大系圖を。豊竹乃
葉末ひろき。漂判官乃子孫
蝦夷を作るとの篇明りそれを
虚か実かしらねども。海為仙人が

饗庭藏書

ゆらしかなんかしこ。抽借を出なくて
諸藝神日紀ハ。續抽がらし。
信を取て軸なくとハ。鼻もうど
うさぶるに
寛保四子の
累代始

作者
八文字
自笑
同
其笑

大系鳥蝦夷噺
一之巻
目録
第一
仙人といふハ費長の男
仙人のなりと雞卵の罵なハ
なし鳥か鴻渡當陰坊が出るまで

第二

茶の價ハ拇も寄ひねび銀壹力
店にある小判をかけとり名る
うれ足のつかひにくひ摩東高賞

第三

私人の身祈を敦賀の里
田舎傾城の道中ハとり
なりが足どり鞦をふもの仗

一

仙人といふハ費十郎の男

唐子西が古硯銘を讀に筆墨ハはたらくによりてよ
くひ頼く。硯ハ拇に陶させてはたらかね花。剤と保つの銀
あり。夜に蝦夷といふるハ東北方の山島にして。海に浩ら
なり程郭多く。中にも松爾羅還といふハ俗にいふ赤蝦
夷にして其中央に都し。むかし日本の名将源義經。此
にへおしまたり給ひしが。鳴人その武威に服して。大王ナと
あがめ其十六代目を。占番城瑪瑙耶松王と。唐人の覆
鏡の指を号ハつかせられども。先祖義經王の遺風を守り。
何なりも日本風にして正月の紙式。雜煮門松ハいふに及
ぜ為遁大黒霧。酒ありに此万歳も。ちやんひんかんかん

ばんてんと。諸音ハかなれども文句ハかなしゞ。龜井行思伊
勢務河その外。義經王より相傳の臣下。子孫ならびこう
元日のはことぶき。かんこうらいくりひうくと賀し
かれば。瑪瑙耶松王歌花ありて。まづ先祖義經王ハもとは
本ゆてハ武将軍頼朝の中なれ共。僧阿にはぐてらき軍功
むなしく。此嶋にまうりかふとゝへ共。故國をまもれぬ心の操
日本の風俗をたつとびかふ有。いまに至てその如しといへども。
年月をなほざ遠ざかれば。有ちがへたるも多かるべし。何とぞ
当時日本の風をのこしたゝる者あらんかしかへて張たるを
の分を。正さんやと仰かれば。檀守兼房が子孫。椰柳大夫
松南をこゝ出て。ゆるゆ先祖義經王を祀らせかふ。波禹李禹
皇帝の社へ八旬にかけしとゝへたる義いづれにかゝるとも

度て系譜いたし。滅をなげし。海をいたしも有。羽皮等あやし
こゝ拓子とうへば。日本人の中をこゝへ。委ハかたしぎる事ありね。
かれをめされ法師もやとゆらきば。何ゆもせよあやしき儀と
それより。いつを系譜する時刻をさかせ。法使として伊勢宮
後胤。龍々池音南皮まうりむかひかれば。はたして彼蒋西陣
獄の綿純といふ。まぎらす獄を着し杖にもがり。社おにはくく
ぐひ海をする所を。音南皮詞をかけ。半度いかなる人なまだかく
ハ系海をしらるゝや。大王よりの所徴なるぞ。しやく同名中金し
といへば。ぐぐんの義滅をもらくとなげし。今ハ何をかかりかさん
義經公にはかへし。常濟坊海鳥といふものなり。奥州一戦の砲
まはらるゝハ京都へきてあらせの事ありて。まうりのがりし給ふ。
合戦とさうやいなやかけつをうれ共。まづ君ハ此うち死とせ申し

又いつ天地へ立のかせあふともやはゆへ。実者を学ばさゞむかまでハ
大るすの命と金華山にとゞらこゝろ。わかしハ富士足柄にかゝれて。
こゝぞと仙人になる可笑でハくれ孫だ。菓も木も穏念夜の御威
勢になびきぞ。せうことなさに菓をもつて。命をつなぎ俗にいふ
食ぬ気ぶがもじて。気を呑風にまさぐるたおがんだ志らべ。五穀
を食ざれば身ハおのづから悴く。日竟氷ごんにやくに竜のみさ
やうなものにく。むかしのこんにやくにておかば。日数を経てハくさる
ゆゑさにこゝろうへハ。何百年おいてもおかじ理にひとしく。お
りしいとなれば。まして世上の用にもたゞ。五穀をくれ孫だ
こそなれ。りしくなぞ仙人ゆゑ。世ゆゑに費なるものハあるべからぬ。む
しハ木の葉を。つゝりあはせても思ふれた。紺糸検じのたやい
ものにて。その身に思る木葉を。二十歳ばかり里へ小なひ出て代

なし。今様を学ふて思ふが。履歴にもごそつかでよいと。五年
のおりひつさぞござる。然じて日本にむかしより。仙人とよばれそ。
生駒仙といふハ名あつて実所し。久米仙人ハひよんな事をみそ。おろ
さうけまの恥をつゝへし。志かれば。さしあたつて。枕志より弄にこれ
なしとハ。只とこそ心もつき申しこれ。何とぞまゞ思の所ありかと。
なるべきやと思ふても。穏念をたゞかり。御放沢まで出て。学あれ
してこれば。粗朝四三代ハ居て。小僧九代の程もかゝらび。いまハ
足利度一統三代同とかや。此るの年数つくばくぞや。まゞ仙にも
ゝで六七年の思ひとなせり。志かれば人の百年ハ永ちあの三年。
無益さらに此上のうすあるべからぬ。その義経にこそ暇夷へまゝり
めふといふ説を学て。それさへ素するうすなる孫だ。通力ハないよ
ことまりくしと。亂ながら亂をおり。たゞかく山鳥へまゝり。さいま

ざなぎ御そでざれだ。義經公の御社とうけあいり。かやうに御
氣いてし。ぶうへは何とぞ仙人とお止めつゝ往生の願ひてしそ
でざれといへだ。御仕にうちうる青南皮をよこまでとうしまゝ
だなぜこゝ玉瑪瑙耶松王へは。御目見へをねがひやされねと申せ。
御爲志かくとして。何とも西目ないるまでござるが。義經公御一代
に。先ぞ御爲が手栖といふ程の俄をいさき孫だ。書もつゝんぞ
仙人になるといふは。よくく心をつかはねものでなきれだなれば
程なれだ。武士の上の恥辱ぶうへあるべからず。唐土にも仙術といふ
るはあまどもかしこいものはよけて習ふまでだ。拙志などが見へ
ぞ仙となりしは。死ぞこなひとやものにく。術をもつていさる
まではなきれども。もしたれにもおぼしめしてはいかとも西目なくは
目ゑへも孫がひやさんとうれだ。青南皮うちうなづき。[illegible]

めでこれ候なれだ。さのこ早下なされうやうはなりとのおいろ。
そのめでこれまろといふは。鼻の下のながい人にはなる黒君寵は
千年亀は万年云々の長生何の用にこゝろことぞやさいやがるを。
青南皮無理にいざなひそれだ。瑪瑙耶松王御座ちかくめされ。
鼻の下一寸なる人は。其百案のよしやうり。そのつもりとおく
かんがふまだ。その方はおよそ三百案のつもりなまだ。鼻の下三
寸もあるべきに。思ひの外こちらはいうまとさせかへだ。御爲大
こさにおりしがり。もしかりながらむりしの浦傳吉帛は七百案とた
りつとうやしかれだ。鼻の下七寸なるべしはつもりにそは。龍の長
さ七尺なるべし。まつたくさやうの。人れによるまでもは
まづ。うかくくしてものは。月花と長命にござりまされ
だ。義經公まひどき合戦の大将なるに。ひたしゆやうに

長命なるす。何とやらんぶ動のしるしの如に。おがしめ
さんときのどくがれば。よりくその論は無益是まで方
ぐんめぐりし内に。おりしさうなるすたもあらば。かうらき
うもべしの俗のうへ。先ぐ張走とのはるす。仙人あしらいを
知るものなきゆへ大神木食上人とあらふ容にて。そ
ばきりに大麦の汁。休息の上まうり出て。思ひ出し望は
かうるをたのどうし

(二) 茶の價は扨も寄ひ祢び観音力

南膽部州大日本。和泉國堺といふ所に。法華經守せ又
味。彌麥普門丸といふ茶をあきなふ僧あり。観世音菩薩
と石像にこしらへ車にのきてあきをひかせ。たきこ茶一箱
英ぐしく荷なはせ。その身は縛勝ずに。衣の打同しで

しく口上とのべ。抑此此茶と申れば。観世音大菩薩の此者に
よりて。調合いたしこれば。病人の信心がさらの此内説へ
なるへば。是此一ふくの茶。菩薩のたの此ま下へこれてござる
さるへうちつけて居るにたらまち。此ま上に居れた所絵が
さらの此力にもゆるぬとの此志めしには。此ま上へねぞくりつを
てもとぐまらば。世上にはいるすあるす引付て。説授を
なひ茶をうりつきるといふ。とけのちがひし。嘆茶。悪僧義
は俗縁の資料。あまる程ある身なれば。うやうに街巷に
て雑喃まはるす。本そこにあら孫た。菩薩の此出にはぞ
しがらく。慈悲の行にてひろめ申れ。ちまにない人は縁
なさ亢生志ねてはしめぬ。ぐ今こうなる人でも。観世
音の此力では。刀刃断て壊と刃物もおれて。たまうるかし

やせぐ。いたんや病苦を。まくひあふるすをやと。さるらうふ
いふおぞ。さあぐの病人あるこあるすら。二貼廿四錢ぐの價
を出して求るふ。かの僧うぎごく。ともみ苦の蓋につこ
上し茶と。手にあたり此方がさろの左の手なぐるふ。十
貼に七ツこ八ツこハ手に引つき。二包ゟ三つみハいかやう
にてもつゞ。下へおちるゆへ。法人壽夫の思ひをなし。
あら有ぐるや示やと。茶代の外に實が錢の。百文ぐらも
さし上るます。此方にひろまり。毎日又十貫六十貫の錢と
志てやりるを。大坂に土西の加氣といふ芝居掛の男是
かどりうけにくい時是に。あれ程なる高ゟ外にあるべかぐ。
そのうへ親代この醫者が。京へのがれて数年学問をしげこ。
いろくの書物をかんがへてさへ。さあ治らぬといふぶんに成てハ。

ゆかね病おかきまいうに神仏の告じやとて。夏中の
沙法いかにしても分りとなし。仏神より藪医者の方が病
になりでのお伝れ手にハよいと。のこしんで居る此世界に。
作がめ引きに錢出して。雪ふやうハなきれども。親音の手へ
引つかせといふ細工ひとつが。室の山とみへたり。是此こまを
習ひおとして。廣い大坂でひろめうしぐ。こどろい無名の
錢よりハ増なるべしと。こうさ三里の左てとに。道頓堀より
ハたなもぐちかれた。朝飯らふて行るに。まぐ屋まへに
堺へ差。大小路の魚を排徊するうち。そはや親音の法
通りじやと。人の山見へて錢の峯をつゝあぎ。親音の夏
熱の口上游のごとくなると。赤氣つゆてありき。日を西
山にうさぶさ。賣茶もそろく仕廻時になりて。賣海の

殘々ふハ別して仕合よく。七拾二貫百疋八文まぐまなぐへ
志て。小判と小玉銀に引久。たさしめ和わらと親意の事
をさ給へかなし。かの僧機嫌よく戒僧へまゐつてかなると。
目もたるさんあとよりつけて。小さびしき不まで種を
ひ久。き僧指はゆきりのうげまで。病気な後いくしたる
ものでござりまする。此ゆ礼としてひとつの。奇術とお
しへやらんさあ。はちかづきに成中れといふゆへ。合点ハ
ゆか孫ども。それハいかなる術ぞといふに。途中にてまた
中上がくし。まづあまきに見へたる。三軒の料理菓屋の
内いづまへなりともは入下さるなし。けさらしの術と
中ハ。まなかちその産業まで。あらたれ中れなし。
かなりぞものをおふせらるなと。同屋してさわいづ

まうへなりとも。はたいりなされませいといふれ。なまと
やらいることとハおりへども。さしうりの丸屋といふへたい
まだ。亭主花嘉をたしめ。仲居下男にいたるまで。
抱いふものひとりもなし。あ氣そこらにある猪飯。さけ
さうなを見て僧にもあるまひ。その身もしてかまたべ
て。幸のかたるやうに。落へまいりませうといざなひい
づるに。ようは出なされたといふものさへなきに。又となり
のをは屋にても。後夜分栄輝唱れども。誰とが
むるものなしそこも立出。擔ぎ屋の友智店へかゝり。
小判二家引きそくらるに。こそくしてたるなから。それ
ハといふ人もなきれだ。僧も肝をつぶしそろく眉に
唾をぬりしりこそだくなりしに。猪はなぐさめや

さんと。漢手の大菜屋へつきゆき。おまそもさあ〳〵
の酒さかなをとり出して。僧をもてなしまさらしの。お
しへやさんとの術ハ。かくのごとくでござる。何をどうし
てもんのとがめぬといふ事。又外よござりますまひ
がのといへば。僧大きなおどろれ。かゝる奇術ハ天竺まも
あるべからぬ。何とぞ此指南。たのみてまつるとのとき。
志りらバ此手あ指の。銀台の此手へ菜の引つくと。つか
ぬまけをおしへ下されよ。引かへまいささんといへば。なまが
さてくさいぜんあ智ふて。三あの此手隙なぞ中く。
手おの銀刀の所作でも。まいるまあらぬ志りらぬ。
たがひに術をりきつけて。一どれにえかたしや。おえ
ハやどもとまていたれ。紛来し硯とりよせ。僧

按のむすのこさぬ。たがひに出てとりかたしなれば。
上来うきしく。ふとこ後におしこゝ。いとあごひしてかへ
ひたるふ。僧も宝を切らる心化して。宿所にかへりかの
一通をひらさまんきだ。一筆かとに戒語へゆき。菜屋
に又軒へお對して。今まいつしおくなし。のち程つきを
同居して。何をとりてくひやはともいふべからぬ。よう
此出なされさともいふべからぬ。もしつきて来ぬとれハ。三
分二ハ返しやされ。三分一ハその事の法さるべしと。さざ
ちおくなし。一あ智屋のるすハ。三あ分の銀をまへかどに
抱てゆき。小判まして出しおきあらるべし。後程つき
のある時ゆてかつるとも。ちとまけがある程に。抱いふて
られらるなと。紛来志りておくなし。左引智ちんまんと

まうれなし。右ミケ条ハ甚秘傳の事なりといへども。
これをお傳をしむるものなり。ゆめく他傳あるべからず
よりてくだんのごとしと云うり。僧ハ大こさに後をうそれ
ども。何事のこれともしれず。大切の親言の。底をまく
りせしうさと。ぢぢんざふとてもかくらばしそ。扨まさか業
ハかの一通をよそうしに。金鉢ハ常の石にて。たのまく
ふびのとこ務ばかりと。磁石にてつくるべし。そ丸葉
に鈴屑をもてしづいるべし。その分ハ手へつゐて落ず。
なるゝ鈴屑をつきざるとも。すぜておくなし。是ハおつる
なり。かやうになきれど人おもひつかず。秘をなしくと
云つけたり。此まゝにやけてハいかゞと。あてが工面の名題
にて。狂言作者へ相談しけれど。それを程に思ひつき。

要神ふ動といふ。三蓋繪と仕組。此家のお姫様わや
しさ痛ばうけなひしと。悪人の家をぬが世界へ披露し。
お姫様の髪の油の中へ。銅の鈴屑をつけて髪につけ
させ。天井の上へ磁石をあげおゐて。その気にて髪を
吸ふゆへ。髪さるにまに立て。おそろしき神に見ゆるす
より。嫁入ハなるまじ。もと。おのきが意慕より。外へやら
ぬ巧の所をこしらへ。此狂言にて出入をとりしまる。かの
鉢をあらふ老嫗が寒の内にても。手のこゞへぬくまりを
おがんて。洗濯するを当つき。その業をまづかの金子
にて習ひうけ。寒中へ寒中におしよせ。軍芸の手に
此くまりをぬらせて。手の毒らぬ様にしるゆへ。合戦
に勝大利を得るに。ひとしかるべしとの名沙法。是ハ

建久二年の事でござり申しき

㊂ 紅人の染術を敦賀の里

緋縮緬も衣に仕立てきて僧正衣とうやまはれ。六尺
切て女の腰にまとへば。下細の名に穢まで紅しと
いへど衣裾にうけてもおなじきぞ。緋縮緬よかとりハ合け
きどもその紅き所によりて貴族殊より。紅でハ太夫
紅といふと。越後でハ紅の紅を染といはれるなぞと
いへど。流れを汲ひとの色とりや。又越前国敦賀にて
ハ千瓢といへり。ぞうきさ後といへど。紅紅どさうりも
ものあへ甚千瓢より一般あがりる女られとあつまりて
も紅信と名づけて。紅寺町といへるよ。娼家三軒紅
國義貞倉が時紅寺の跡といふ遊女と。紅し

のぞてと若年記あもりきし。筋同の象しくして衣裳
も紙子文綱垢づきし八気た夜具も紅絹の三つ蒲団
をつりしかね。おやとまへで小むしの。紅以商人この
紙に紅とうけて。手代めもちざる所よい造風が吹くと
ありるやいなや。帯もろくゐるぞまく拂へ紅高くまり
せてけられゆく。たのもすきちぎりの中ふも。紅前ふ日よ
そじめてのり事さろし。商人五郎八といへるが。新宿屋
のかまへといふ女の形中と見てなづそられた。この
五郎八といふ男。紅おなても紫い者と。高くある十銭
遊女ゆへ。此ふたび十八艘といふ紅前の。紅紅頃よたの
まれ。紅分の名ね持付るすも。此男よ打まかせてのおれも。
又十三といふ紫のさわりるすまて。此中風次わしくちくよ

逗留する。私くよりも。むつかしひ志みしてもらゆれば。人
のあそびにゆくを志かりはまれども。自然はゆるれぬ青尾合。
さしぞといふて志のびに。案内なしの魔法までハ手がさぐ
かぬ。ひとりもやくやと相思ふにつけて。せめてハ心のうけを
志しせさく。ぶぎり出まるがたよりと成て。私の炊奴をこき
しこ一ふぞ。恋の女をもらせおんりなる。奥に何ぞ家が出て
やらふてもおぼへぞ。それよく田もとで。昆布切の藻ちら
が店屋の娘へやられて女に出てあつたと思ひいづして逢
ひてのの後のこと誠にくらぶれば。むかしは袖をおもはざりなり
とは。あふて後の家といふすもしらぞ。私人の見ぬ所に。乾
鮭みなそんておかりそれだ。若くら情ある女をして。返す
こゑぐと志えてぬ。さかどんにむかしがられなふ所なるぞ。

教門はたのこもなされがさうらんまで。さよひ角屋傳たと
申ば。おげやまでは出ずるべし。まちうけやさんとの奥に。
志生も松本の人さん家をかいておかしさるに。家なくてはい
ぐと。恋の女づらしをさがして。ゆゑ恋は様の下なる古え
結。これとりあきていふ人もなしと。ちらし出よしこると。五良
八は家は返すになる。家でないといふ心もつぐ。住吉明神
の守りと一所に鎖へいれて。首にかけられさかざりなく。
想さいまうい扉が風待ひまどるとて。あそび所へ出りけら
まて。心もとない足切に往て来ると。子細らしくいふとさ
あと欲ハ。五良八反が見またりに出るを待に。これもゆくな
とひそまるとさいたゆる。うものを深の本御拝に。茜の志
ぎり裏もみぢかく。又ハ親重代の真宗なれば。長脇ぶをし

ふて君まあれば。夜柄なりしめぬさの。みをのやうの景清が兜かけてされ。下紐は結ぶの神の縁結ぶと。注文を状ぐり付て。袴ぶれの紀音のおよりわがりしが。敦賀の町まで木綿屋に。紅ざらさの切ぐの。狗さげてあるをみつけ。志ましたちと思りて思案し。六尺と八十里うらつけあげ。百十里よりふてたしぬいまでもなくちとしてとりますると。帯仕なをもふりまで。下地の下帯をみところの内まで。純へくろめさらさのふんどしに。忍ことをいそくして。角屋とたづまゆくうちに。たやうそくらがりになれば。下地の志さ帯どこそまかくしおゐて。あどりに紅てうらんとみあらせられた。思ふやうなる不もなし。これが家かは志らぬ用心の水滴捕とさいはあるまそのうしろなる。廣芥の内へおしかし

たしかがうふり出る六疋とたる。そのあまてはをもてぎ。見まで人の楊枝つかふを視ていあれは何のうちに中を浚るすぞ。あのやうに素糟を除ていあ。食物に味がまさまいと年くふ寒に思ひしなる。此時さらまと解て。さて年の大四しの時。総会まで小田原外良。一粒を一強づとひしと。世間の費とおざかりしが。今日のいまに成ていあ。一粒一百でも無しく。私中でも假紅壇さしらへて。毎朝の急紅に用ふしたる。大坂川堂のおで買ておいたる。紅お来昭書をはふくめば。寂光浄土の番ひとたる。揚屋へもいれば大きさ此まうであらふと。黒金が出むりふくみ郡さんへと。背中をほとゝたらけば。ひくまつて身を居風呂へ入さやうに。又祈に志そてたづうしく。産後へ毎れぞあられに

いり是の菓子盤を。花瓶が持て出きた。自身家乃
幽地してゐるに。いまゝら盤とりあぎ。只ふ気へあげまれ
とさしもの十番整男。これがおしへねた。今やといふ事
を自然とおぼへ。ふところの内で。何ぞんかさぐりくらべてえ
て。青七八分ある小玉銀を。ふたつぎりの半紙のとる紙に
ひこそ。就打ありあ志でござると。女郎へ打つきにすげむ
手のとい。寄まいりの癖うせびして。やりながらおがむやう
な幽になる内。もや結部を出しかけたり。此不海鳥にて
魚乾沢山なれども。拘ずさ鄙びて本けさろに。赤小
是食向ふに羅四。たてと油あげの是腐のこくやう。引
て石王餌魚を。山椒こそのでんがく。吸拘ハ鯉のまゝまし。
亭主まゝり出て鯉にハ。くもまゝをいれるとうけたまゝり

ましこれた。腸のありそうな。よい蜘蛛がござりませぬ。
そのかはりに蟹のまゝをいれましたといへば。五郎八も初さ
髭して。蟹のまゝハこのまゝた。不によりて海丹ともやて。
黄蚊いてもものでござると。どうも吸まひ拘と。眼をかさ
いで。こばいまで義理にかへる内。東の山の端へ出る月
のおりしろさ。五郎八ながめ入て居るゆへ。發句かかりとなさ
れまもうて。亭主我をおれば。五郎八そろく座へおりて。
蒔のかへ立より月をみてり。蒔をながめたりまるゆへ。さて
こそ月に蒔を。よこそあたせらるとうとみて居れば。さハなく
志てまゝさおしまけて。小使をしたりうへまで。月にむかひ手
をあたせ南量なる浜松と。目をふさいでおがむに。真言
さめそうな不と。女郎もお鉢揚すと感じ入。三味線をて

江鴻ぶしをうとふ。声ハ志えがれて来た。又命八が耳まハ。辺
陵びんがよりうろうしく。ろくに居るとて折く。紅ざらさ
の下帯ゑせかけたい心も。喜めきたる気中。ふとおりひ
出して水桶の陰に。かくしおきし右下帯まハ。全き者
三十あかくりつきたるに。拳のせくまての仕業と。それ
より酒ものどくしたりうね。いまくらが小姿も耳まいらぬ
こそ。たつたりとまれたるすがある。いんで来うと立を。ろ
てとむるにめいまくしながら。ろくに今来ませうとはしま
出。まうくいふてくどんの下くかけつき。さがして見れども。
さいぜんおしからせし時。そばに寝て居る気合が。見付て
起てのきしたる。合木をさがしてもあらむこそ。拳もきゑう
らんのごとく。笹の葉もうたげうねぬていま。さまげたくやめ

ども。そのうひなりうき。あげやまハ詩なりて。てうちんとが
させたづまありき。アリくにめぐりあひて。いやといふを云さ
ぼつてかゑる。屋風引まれせど。嵯くらが情に金のこも
まれ。三十あといふ金をうしなひたるよりいつそのるす。やけ
ふなりてきれより。ゆくかどまつふ程に。かくり私をなく。
吹風に帆をあげて出てゆをども。又命八私十八般ハおり
ら夜の色ぐるひまて出さず。これこまいものもなく。私ハ
水をめつさづるひまして。昆布投子がうぐら。まうめ何らめ
安賣に賣こそ。十八般ともに。乾鮭の眼とさのに。落を
をぬきける程に。今ハ古いへもうりがたく。嵯会が二世を
といひしを。せめて死出の友と。心中の仮合しかけて
見れば。二十百あめつてござんせといふ。後と帆だしら

と一所に立て。空船にてあてなしにはせ出せば。おのり
なれば悉破船して。命からぐ皆ちりぐに成て。行
出されぬ身とハなりぬ。是より小國者ハ遊女にあへば。
船を傾なるとて。傾船度といふておそれきらひ。夜
く遊女に金もらふて。別上と云なとしてといふ者
と。山のいもがうなぎになるといふ法ハ。はなしハきけ
た。悪にあたるものなしと。上方へのぼる上乗船ハ。
荒敷の事りとかくるなり。かくて法度に定なるとなん

一之巻終

大系圖蝦夷噺　二之巻

目録

第一　筆道の巻ハ夜と夜字の界
石に入て三分とかくいぢな筆勢
臺笠笠小代ても大筆を筆

第二　奇学の宗通ハ蛙の奇袋
　　井出の山ざきちりかゝる男子鼠
　　ひきとむる思案ハふかい池の相好

第三　料理の手際匕先の働
　　瓶治屋の合縦うちよりての
　　あんどいこん立ハ牧ぐ牧子の吸物

㊀　筆屋の巻ハ友と夏の字の界
契情の親人とおよがせしを。その屋におゐてハ藝の内
なるだし。それにつゐて相うくるハ。たがひによめて。
の埒さへあけざまむるなるよ。和詮書てもよめぬ
様に。うねくる紙紙去と。仮名七ゐ四方のつぎ紙ゑ。
たゞ一字の壽の字を。かいことの自慢なる大字。何
のこゝめになるるすぞや。思ふるを書仰ふるも。一寸の文
字にハ弓ぐ。親者の音の字も。筆でかけば七百なき
ど。真の時が結句六百じやと。いふくらゐにさへなくば。
屋用の字形の形がかゝりしるハ。あのむべからぬ。大黒
屋治氣といはるハ。京都にて人もしりたる店商帳

ともに表出をしてやるより。めつきりと商賣をやり出し。手代あまた蓋なるべく。正月十日戌お後には。店されの竹の葉みざやうに。大福帳を表帋一ぱいに。まそぐのあかねやうに出おぼへ。そろく筆尾がやつて見たふなり。虎といふ字の尾をひらくとう縁らせ。竹の字に節をつけて。庵のつくり樹を。臺笠立笠に仕立白槙の龍虎に木で眼をつくり。去でありしらへる西行のある所でなきれど。ついこそにもたらまぬ筆勢。それが圍じて玉板へかゝり。水出の手字文出おぼへしより。あらはをそり筆を堂といふ。朱印のおしらへしより。帳の表出の和人。沢中にうまく成につけて。王羲之の風に非に祝る字ぶり。俗解にてハ人のうやまひなりんと。なるまをごそくとそり。揚もこころて見ねど。すまぬ世の中と衣やらハ娃やらしれぬ姿となり。中子元の肩板と自筆と共に。恥を書あらはしなるに。切角よめる手紙を出ぐづしに来る筆。あてにつどひ繁昌につけて。東山までの大字會。まへりどよりの俗しにて。その日に至るれど筆を先生。且相ちまてかりうる素拙。辻やとひの三まいぐ。中子を二行にあまりませ。菜筆大筆を先出刀のかゝりにぐづうを。おとよりハつゐのたきみ筆へ。硯毛鍾をいれさせ。一町あまりふらせなるが。葬礼と見ちぐて。龍以のあげでうちん二張。豆中にもらせうるもおかしうき。掛東山珍珂に。幕をうらせまち交の中子。今やおそしとざハつく不へ。素拙おろさぐ。筆

行樂梅川
まづあをあげませふ
でーたさがぐ
しゃう
やれきつけよく

でーたさがぐ
きりつぶせ
そいはあいいきがきれる
さそもいそいぞぞく
げんをうごよのりいそぎ事
そじやく
東山の産業を大文字の會

を先生上座につき。重るすなじゆりて後。いづきを
思ひくに唐紙へのうちつけ書。壁に張るべて批
判宮中。男子のうちより。むかしの弘法大師は。口と
女手と女足に筆をとさみて。一時に把をかくまし
ゆへ。五筆和尚と今ノに名たかし。何とぞ先生にもせめ
て。三筆の四名などのるすをが和といへば。筆を大きま
せいてまが筆法弘法大師にまさんや。さらば曲筆
の手ぎん。いづきものお目にかくべし。弘法大師に又
筆の名あらば。身は六筆の奇妙を。あらはし見
せんと。口に筆をくはへ。女手女足にも。筆をくらり
つけ。心分ては五筆なり。今一本のはさみ取にこまり。
耳へも鼻へもはさみがらく。偏に思ひ付て中筆一本。

庭の穴にひつはさみ。唐帋の上へうつさて。あまり筆
勢をはらくかんと。力をいれるうへに。口と女手のうち
らき一時にかく。撮手に。しりもちをどうとつきたるま。
しりにはさみたる筆。独とまに内へつりたれば。あいさく
と先生目をまはされ。やまし医者よ祈禱よと。大さは
紙の中にも切れなる男ありて。外の医者ではゆくまい
と宮川町に居る。痔医者をまねき。容体をたゞせけ
ゆるむかしより。楽筆とやるはうけたまはりしが。穴
筆とやはらで今がはじめでござると。そげぬさの膏
薬をはらんとおれた。七ハすだうの筆が。さなさげと
なりてはらまだ。いかでせんといふ内。先生やうく筆も
つきて。くるしき息の下にうつ。いづきもお世話にかさ

まことにたぐひすくなきなりかし。その王義之といひたる能玄ハ。わがま
ま筆法習つくし。右へ払と云ひまた。左りに入て云々とか
つくへにあつるまで見在のたとへに死に入て云ふとも字ハ
ぞ。王義之ハまた何からぬ所がありとなし。今とても
と。筆法の冥加よくひとなれバ。きせよと思ひおくす。
さりながら字をかきならふとよんだ。弟子中ハ一流のおもむきと。師匠
殿のおしへをよくまもりて。門下弟子にも筆の法を
引ねけだちおくぞうらひつ。その弟子中より三
筆和尚とうやまひ。いよいよ信仰ありがたがりける。さ
まで此先生方ぐよろたの様子。扁額をのぞまれ
るが。ある時さる大寺の楼門の額をかけあげんとて。
おしかけ来る事ハ所のそ。屋根の上より細引をつりさげ。

六筆先生の。きる物の襟に縄をつけて。くだんの細引
にて宙につりさげ。筆に墨をふくませてうちかゝるに
目も眩き心も身にそはず。ふるへやあぶなやと思ひく
額をかきたる。さし楼門あまりたかくして。五雲ふきさ時
る額より下に。雲をみるとて即。五雲楼といふ額
なるに。先生手ぬかきぬかるやうなれども。文字是非
なく五雲楼の。五の字のうへをむすびそれだ。五
雲楼になりたり。五といふ字も五の字も。ゆくハひとつ
とおぼへけるぞ。それより世上に。五雲先生とよびゆ
るもあまやかそうしやと思ひなし人々そこうの内に中にも
手おとり。なるひいてうれんぞ。風流と同様に如くなと。
いよいよ自慢やまざりけり

㊁ 家学の宗通ハ蛙の家代表

やまあと家ハ。人の母ぬとまるより。すぎたるを
学の種まで。演のまさごハよみつくしとも。演世のた
孫ハよそつくしなれば。京の中を毎歩ぐるく孫子
めぐりて。人のおとしさ拘拾世演あり。白氏よこを
とまして。まぎとなめくぶりをまし。磋にまさせ
て。贋水晶をのくるものもあきだ。何でなりたまさ
らきぬといふる所し。伊勢の山田わたりまてハ。鈴一
斗を拝一文か二文にさまめて。さぎんてありく者あり。
今ハむかし隨雲法師といふるハ。そのもとをこしの
高人なりしが。愛鳴の風雅分まてハ。海外にある系

地に庵をしめ。百人一首一組の大きもゆゑまして
万葉集源氏拘がたりに力を用ひぞ。廿一代集の撰志
をさんぞ。手帳出さねば。返答のなるぬ仕合。なるぞ口
にハ家学者とかと。家よそとかれがありとハ。その乗
うたよそじやといたんだりうた後にして。和家の會に
て産につく時ハ。くるりとまよりて平産するる。東常
まてハ福がたくれて。しるゆへなるに。福もひかぬ所
人百性の。會にくるりとかたらして。龍笑の和にも
孫にるるす同様がし。下常でも引ぎりて。かくハまえ
るすにやとまして居きだ。麻上下思ながら。百万米
常の名さぢれ坊至分ハ遍照。素性がありひとなし。
宗通親する隨雲ハ。自身を西行と心ぬ。唐号も

東河庵と名づけ。何ぞやうらしひとすをいとねだん。くが
ありひつりぬゆへぞろく古跡と號じ。風雅集をそし
里その弟。その百歩一の場へもいたらじ。源氏物語の
まねしが出来ぬ。蛍合せと名は。光源氏まれなる
来まじきと。都さ話まへでも一流の弟子ども。いかにも
さるさそでござりまするゆゑせそへぬけがらじやとや
申する額よ。たくさあるかでかぬござり申しつるんと。
来てもつかぬ祖師法されども。さらり宗よみしやと
いふようて。抑いそうとりそ。弟子よするもの外く。
門前の弟子を前挙着るまで。練筆と去てめ源
割をむるまさあ給まへとらへで弟子の持を寄る
家の内まで他さとのきりきしと。弟相の分ではまござ。

此格ハとるやいとりふて。りが趣向へとりこむるが。きのふ
まふ手習の師匠家としても。子共まおる往をおぼへ
ぞ。遠近の紙屋から。元質まるをもらび若いもの共が
上まうとおもふて。すらひよゆけぞる砂田村の親ハ御兵
小者へて通まで。外百姓のうちとのぞまざて外題
さへあるねうるひよふ母の。今からのをかうらひへよふ
うじ。内百姓をまみれそりのるすとりふ旅売る
ぞ善日龍神ととそこまめる絵より。さうひ夜引出
してあるひくきぞ。此師匠殿善日龍神つかまう
たふさるかし。あるきぞとてあるねといふをまで。さる
ぞ一ぶまうとひまあよとぞ。しむかひよなをか中よ並て
うるふよ。結句弟子ハ不そてまへうぞるひ御座る

飢まで。節講に帰きたんねども。師遁夏ハ不ぐまで
ゆきつまらせ。奥にいたり八大勢王の名の脇。一気に
よめばやうく。半子に引ぎらせて。汗をかいてう
たひしまひながら。半子のうしひりたに。小子いふた
ぐひとむとしく。大かたの子ハ半子に習ふて師
遁の蕓のあがるす。きわしまくなりしば。遁雲
法師思案しなるハ大ていのすでハ今時名を
うれぎさらば。秀句をひとつよそて人丸赤人
ともよんだ程に。世につたふべしといろく。工ま
し不佺旅をして。屋中にその百首をよまばや
と。日本廻国いたすと。全不へいと女乞とし。奥の
屋へ引こもりぎりやうしふやう。百首よみたれども。

拙三里とゆくことならぬ脇にて。出せば拙入かかし
とされが来ても。是方へまいらせましことといたせ
て。炎天に龍を干つけ。塩水をしらん至。折く
龍へ折て。濱風にあたりし龍に仕立。塩水にて
ぬきたる龍を。日に干ほるす六七十日。面皮うすく
とむけて引たる。いたきすたんがたれた。さてが風
雅をうざる不と。読よりけて見れば。自然とくろ
たる小ハ遠ひ。意に日よりけて塩水をかたるもの
ゆへ。皺のよりたるす。ちりめん細工の猿のごとし。
是でいいかごと。ぬきまぬぐひをあてて。そのうへより
火のしをかけられば。やうく皺ハのびられども。
同口引つりてしたんがたし。既沱紫に何ぞ。め

づゝしひ柏と。いきさいと弱させしまゝある人。定家
卿の柏をまいりうる筈じやとて。かくし持て居る
と説授はなをれども。金を歩に賞とり。蝶丸をん
つかれし。鍾木杖と笑て。逢坂と名づけしを。銀
百目にもとめ。西行法師よりつたりし。木綿風
呂敷なりといふと。是ハちとる恵なれた。三夏に
そのへ。まざ是までもあきうらぬ。私板の木ぎつき。
是ハ人にハつけよあまのつり私と。小理の筆のよ
ゆまし。そのつり私の古く狐うる柏と。別して自慢
し。秋の内に宿を出ぐ。秋の引あけに二三町も
まはり。只今まかりかゝりしと。ちとそこびきうる
ていに。よろしくして在所へ立よれば。扨もく志ハ

けにおあひなさまたゆへ。四龍がくろこましたといふ
時。たじめておちつき。百首のよこ家と。世上に板嶋
しそれぞめつきりと牛子も満さり。それより町住
ゐにそまぐ。浮ぶふるびうる百性家の。屋根まうを
賞とりまざと。くづきかゝりうるやうなる。唐室と
うまへ此屋祢ハ。天智天皇の。秋の田のかりかれ唐
と。よませなるや祢なるが。山科亀より名いざせし
と所ぐまざと。まうとまりしておいて。夜のあるやうに
志かけ。ふしぎハ今に。霧などがありまもると。急て
のくさりうるを人にひきうしうる。此うへ何とぞ。人
のせぬるすがしてくなりて。さまぐ笑わるに。春の
出の蛙を所中へ一つまでもいきおけば。そかの

蛙者をとめてなりけれど字也。ふたるに面のふる
宮中。玉手へ飛御をやりて。井出の蛙ふりとり
よせ。さいはる居室のうしろよ。かしましい程蛙のなく
池のありけれど。それへはなち。山ぶきなど岸にうへ
かけて。井出の蛙をはなしければ。外の蛙が音をも
とめしといふ。外の類向を案じ居るに。まことに
蛙一ツもなかざりけれど。名相ハあらそハきぬと
思ふて。うんじ入て居るに。きのどくや我に入て。蛙
のなくなすまへにかはらば。と度いれさせる井出の
蛙ふりだけ。おかく鳴までの遠ひまで。かしゆし
さまさりければ。切角我にやりたる彼の手まへを
あり。あききけ外の蛙まで。井出のなくづにつき

て声が寄ふなりたれ。ふしぎでハないかとハ。是も
類向のひとつとて。思ひきやといふ不文字を書て。
あんじてみたるなん

㊂ 料理の手際已先の働

むかしハ胡蘿蔔にて菓をきざみ。大根にて
さらし花をきりたる。しやし相をほめまるう。
今ハ細工まぎたる料理ハ。何とやらんむまけ
たらて。賞賜する人なし。いかにも他意なれば
とて。奥鳥だかりつかひ流めたる。手づくなる献立
ハ。田舎めきたるとてがそんなれば。あまりうもくと
したるあんばいハ。茶屋めいたりとてのしまぬ也

ずいうん法師
およくて
おまんまる

ずのこの
もいものとハ

の中。さうく容によりて。抱ぎさもちがへ候し。然ハ
亭主の口がつめてまゐるものまで。亭主から口
なれば。客ともから口にあいしらい。亭主あ後ろ
なきば。客ともあしらいにまるるすたりたいが分
もお明じるふや。いなかたつこるすがしていとて。蛸
の子ぶりり。幌の名者も。貴賤ハしがらし。さくに
都三条魚に。梅井挿唐といふ医者。生質て科
理とあのこのり抱の内にても。献立のこにさ所とつ
ら病人の脉胎ふ内も。さし身にハあらひ鯉。い
ま酒ハあまこまぜたれば。蓼酢などのくすのこ菜
の配劑も是にひとしく。是ハ證治準繩の方なれ
ども。是へ生姜一片とハ古しとて。山葵にしかへてさし

づまれば。痛苦肝とつぶし。熨薬にまさびゆこそ。
あまりさんざるすと思へども。たゞり医者のことなき
ば。もしや古方にもあるすかと。のませてみるに思ひ
の外。むひとまりし食をまくめ。効験ハ医案の外
にみへて。敗毒散などをあるにも。十二月のたじめ
比より。正月二月までハ。獨活をつかへた。三月るその
うどハ世間にも沢山るて。病人への地産にならず
ぞと。四月のさし入りたれ。獨活のかたりに。竹筍の
たへ出しと。揚ぎりにして用るなど。上戸とみれば
耳草をいれば。番椒の粉をいき。にがこの色菜と
小根にして。うまくと出るやうに仕かけさまれば。お
のくこがロにあふより。病も治し繁留おびらし

りなり。たゞるにしたがひて。贅言といふなすつよく。
身上のよいにつけてハ。料理人も名あるとかへめづ
らしいなすをものゝ。同がゝるおもしその隣に。あま
ゆちいさい家にもめぐとて。世界から美名をつ
けて。小瓶治とよばるゝ小刀瓶治あり。猪にハ日本
康小刀宗通。石鍋守来金無とまりなるが。是も
料理としのゝ。ふいご祭に蕎麦きりを。うつやう
なそげたる相ぎき。いなり明神根も方こゝそ。小豆
めしハあがりあるせらるべし。そこをそむきりと切
久祢だ。此地走にならばとのこんぞて。世の忍せもの
なりなるが。猪子まで見まんだ。粹居よりこび是
ハくさいまゐ。こゞ今小田間屋から。あまりよい粉子

をもらひましたれば。ふるまひませうが。志うゆに
志うしてくふか。あんものにもるより外に。よい思ひ
つきもなしといへば。来金無がいゐるハ。粉子の吸
相といふなす。つゐにうけあちらば。何とすゐしけ
ゐてなされて。ゆらんじませねしといへば。是ハおも
し誘いしうしが。まり山椒をしうけさせてあんだい
よしと。吸相椀へよそひ出ばと。亭主も客も
箸をあて。扨もよいかぎんと。舌打のうへ粉子を
くふてゐるに。石か鉄にそつくりたるごとく。中く
歯のたつぎさていにあらば。ひよくりまちし
ても。まつてゐても。鹿狼の牙をもて祢だ。かこ
あなをぎさやうぞなき。思じて粉子ハ。火にかけ

てハくれるものにあらぐ。是抱ずきハあらしかれども。製法にさぐまりありて。煮てハくれぬものといふなるを志らざる矣なり。されば医術もそのとをりにて。薬といふ薬に。そのへる製法あり。是にあらる痛ありて。其場を志らざれば用ふべし。酒製塩製童便製など。おのくそのそなへあるなり。救子ハしやうゆがけかあへものを製とし。いづきは理なきものハあらじ。志かれば。いたきざる。医者の料理ずきハ医者の製法にあらぐと。ふかしくありひきなて。方薬にのミ工夫をらしし。つゐに名医のかまきをとりたり。来令医も大に悟たし。小刀を打

火あぢを發明し。火にほよくかぐ生き場と。よくかくなさ不をおがへ。上手の名を名なるとなん。あたまぶしといふ御なりハ。きれめてかくいかしなきだ。御なりなぐら急度しらる。庭友でかくらきだ。繰日おにてきく人も心志まり是を契情白栢子がかくきだ子細らしうて。救子の吸抱のどく。真もさむるなるべし。國なまぶしと。かくい庭そかくきだ。人がらをそこみてこゝ曲きども。女まじくらの不でハかくる人に色をこちぞするなれば。薬もか職ゆへておの遠ひにて。生死へかり。瘢治も人の粗とする抱を。神所して打なきれなし。まなて世上のすなくめしとなん

二之巻終

大系篇蝦夷新

三之巻

目録

第一

親に不孝な悪者の神道者

森屋大太郎が幼壇に祀る祖の言

ひごとする儀釈をきてあてこう笏

第二　音楽の誓古調子の合ぬ仲間
曲手まりがかるまざのさゞ紀と
まらられて返答す地の笛箱

第三　茉の名我言張二人固き地
和尚の情に茅瓜の東ぐり
志りの知きぬ旅衣きつゝ心中

㊀ 親に不孝な悪者の神道者

止保加養。恵養多女。坎艮震巽。離坤兌乾。
はしへてあふきよめてたまふと。木綿襷とやらを
袈裟がけにして。鈴とふり神乃講中。世上にめざちて
これぞ死がし。神乃の葬礼にして見てやと。たのしミ
のひとつにまちうけ。病人があきだとり思して中
臣祓くりかけく。責念仏のごとく。さんげくおし
めに八大こんがうといふも。役行者講とかたるなし。
筆のよもき病人ハ。筆をとりのがせてせりつめ。
行縛だのこと。茉に力といわざる者。いかなるつよき
ものも頃事によりて。黄泉平坂の偽授。習ひ

して。ひとり合点のゆく場にいたれり。病のたまうるを
すじくは業英計の所は農生なるべし。祈禱のれ
守り加持祈禱をのこ。香水のかげにてあたかに深利。
あとへもされへもゆかぬ病人おかし。業計英にて病
を治するは理あり。祈禱加持にて治するは妙なり。妙は
ちくがたく。理はちくへてみるがごとくものなきだ。
妙をもてて眼前の理を識るを。達人とも智者とも
いふべし。口にはなへて。祈禱となるといふしは。たとへ
その人精識宏才にても。愚人にまざれなるだ
きな。難波南江といふ所に。耗穂穏戸といふる神
居者あり。もとは法華坊主なりしが。還俗して神居と
名づけ。仏法をそしるとて。なもまざまるまざ。ことぐく

仏法のとりおこなひを乱て。人にまくめ仏壇をくだかせ。
おしごを流し日蓮をくだくに。人心新花なるまにいふ
まやまく。ちやるまたとなんかたりし。此才子に嘉成大
右衛門といふるは。八百万仏倒命と。師家より名をゆるされ。
ちなへぎきにてありなるが。その親居節夫妻は。しき
ちんざる後生ねがひにて。日蓮宗のかたづくりなれば。月
次の題目鐘。年々つとめきたりしに。大右衛門神居
者となりてよりは。寺参りの小づかひもまさざれ。社
めぐりをなさわうなるだ。今報はおしむまいといへども。
諸法の罪のがれがたしと。親も子も遍屋にまよひ
て。いつとも父子ふ和になりても。親は子を思ふまたろの
やうにて。邪見をなげき。三世をしらぬ便さいやま

うちやうで
おりやおらが
親をぜんく
ふこうもの
そこゐや
子のふうを
みてろのぐる
親ごうそろ
子ふふすん
なきんぐる

あさの
れうけんぜん
うけてござれ
あさの
くく
きのふの
あすく
べもう
ござれ
くく
二八のそば切
うどん
もりくまい
くく
うのちやく
大ぜいさんけの
くんじもの

されば。息男は此神国にうまれきて。異国の人形を
あがむる理なし。それ程とうとくばかりその為い。
極楽とやらんへゆかつしやきと。おらけなくいへば。ユ、ふ孝
ふめが土も木も皆是。仏界のものならばや。おのきそ
きなどありがたくば。小祠をつくりて。はいつておきか
しと。涙とたまはらしたられば。神力のそふる此是
てろえんへと。親ともいはせば跳つけながら。神を神
ともおぼしめさねゆへ。神様たちのおりうつまてふま
せなふと。してかなめにあはせば。はちあたれといおも
はねども。涙ながら南無妙法蓮花経の。声もかきこ
おやぢは一君にいりにける。想じて神君といふるは。我と
よくめつたにいかつに成て。仏法をそしるすとばかり

ふ孝ふ君までは君とも法ともいはれざるまを
をしらば。あさ海しきまざるべし。これによりて雲
ごひの神君は。子が姫ふか女房が。やまひの床に
ふするかの時は。ふたかに也珠数くりかけて。百日法
花の歌ごてするす。ひとへにしりのよはい男ごその
如し。生死人を神となづけ。柳につこて咎もなき亡
者を。簀巻にしるていたらく。きのふ死たる死骸に。
神号をつけてとりあつかはば。常々の稼をさり。清火
の叱咤もいらぬすなるべし。此死あつかひもとらく。仏
家の往生極楽より出て。高天原に生ずるとの儀。
千巻万巻の書をよみても。悪なるしるし此こんに至
ばからば。を手うは幸神君は。多し。ゆゑんまぐらばと

なん。又天波といふる下に。年おほて後生願ひの
質屋あり。長屋二三氣といふる。紙具とさへいへば金
がさとうして。俗用の抱ハ。思ひの外金をかさぬ。志めし
の抱な抱でも。紙おの折敷じやといへば。笑用なしよ。
アヽラもつたいなやといふて。紙費の殘ハことよりて。利
なしまもかもとぞ。あまり紙具ずきまして。躰上ふかつ
てふ成る時。日比このミまりたる。あらざぬ氣へたのミ
かけてゆれども。一殘のたよりまもなしぬ。もらひ女
もかといつのすかハ。備金のかたへ家賦をまして。
紙具だかりハ丸のさ。さる京都のちがたへ寄附し
てその身。出家分になりて著しぬ。此出家分の分
の家ハ。愚女をなすれぬ名まやまたかん。扱彼さめ愚

なる紙具とおもふかゆるに。法然上人の鼻紙ぞく弥。
おなじく前中黒。三途川の姥より。お侍のせんぞ袷
などとなじめさして。七宝の前机。慈猿和尚自筆
の巻去仕。その外さなぐの抱とりあつめ。寄附の寺
主とお侍のうへ。宝抱冥帳をしめるに。羅尼おびて
しかりなり。その宝抱の中一とたつるハ。阿弥陀如来
の法印判なり。弘山もやうの錦の袋にいきて。是を
紙におしていたゞかれ。此礼殘三百文ゞにきため。是
とさへ棺桶へいきてゆけば。極楽の東門ハ所なしよ
とをる切手なり。さゞし南門西門ハ愛人遠ふゆへ。
此切手に金三友ゞ。立まへ殘といふを出さねば。遠
らまだ万一勝手をしらぬ。外の門へかりたるとれの

うめ。それもおくれまとまて。四宮とをり切手といふとそへて出せば。所は百文の楮銭が入るなり。あの方へ行て三友の所をうつて百文といへやまひおまくひなるべきや。坂鶴しかれば其がうや家やと。此せちなる人名添れともに。四百文といふ銭をいづして。いづくなる正のごとし。その寺を所は。そばきりやあるが。紀諸の人数立かたりいりかたり。そばきりをくひたるが。又六人づきまてあてまいりこそ。そば切を喰ふ時。そばきりなの幸をつくぐとみて。おまへがた極楽の通り札。いづかつ志りましたそうなといふゆへ。何としてあなたもそれを志られたるぞといふ。お顔はありくとあらなきてござる。得しおちらにござる。最いお人ばかりは。おいたづきなされぬそうなといふを。あれはふ思儀じやいかはも。此男一人はいづかぬと肝をつぶそば。なんとさうでござりませうがな。そのめきてとて所はいござりませぬが。所の口鼠とちがひ。眼つきがくりくといふしましていかあしてもうしこそうな。顔つきぞござりなするかどまよりや。いづきはなされまいといふそれだ。一死真さめて立しとなん

㊁ 青楽の雑古調子の合ぬ仲る

楽は人の心神和し。青律の協化をたつとむまだ。これが用ひざらんや。あるは伝与の中村は。安日堂左る先といふ浪人あり。世まうなく教く

やむるすと語れ。儒書の講釈に。才子もこしあつ
まり。理屋ばりたる無論。いかど思ひつきたん京への
ぼりて。楽人西儀雅楽助に出あひ。篳篥のけいこ
百日むかうして。いよへ陽り五常楽越天楽を。朝
から晩まで吹たるを。色芝にもつゐに学ばれぬ
るすゆへ。極楽の声がきるとおぼへて。ありがたがる
内物ごのこきるものありて。ひちまきの才子と成。
いつとなく。たるえを。音楽の家のやうに沙汰し。
寺院場の法事開闢あも。此才子とやとひ。おん
がく花とふらせたるに。その薄村に麩屋の治兵
とて。生国南部のものなりしが。南部は伶人の多き
所ゆへ。自然とひちまきをおぼへ。百日やそこら京に

居たとて。音球の師範とは片ちらいうしと。たるの
元をあざければ。たるえ才子よりは。麩屋は足こそ
遅れなるべけれ。分ふ相應なる。ひちまきは沙汰と
のしまいつとなく安量たるなれば。安たるがた
麩治方とて。あ流いきなひをあらそひたるに。安
たるは物いきたる整古なきは。日数に切なく。麩
治は自然のこなれた。左しやたる整古なきゆへ
大きさは牛角にまんへたる所に。何ものかきたりたん。
れを立て。一首の狂歌に。百日の整古の月まき
ぞあさ尚しや。およぐぬふじに吹かたんとは。安た
るはなるをふくうらえ。大きさ見は麩治方より。
立たる物なるんとそねこおこり。地取職へ内こより。

ひそうに出付をさし上。麩屋の沢系がひちつきの
調子には亡國のしるし。あらはれたりとや上られば。
地獄には何のまけもしりあはれば。蛇のまちはな
びとやらんなれば。安たるが注をするなれば
まておうきぞと。双方ともめし出され。さつと吐味
をとげられば。麩屋治系以の弁におどろき。旬
朝は樂不なれば。吹おがくたる藝なり。たるえぐら
ゐのひちつきにて。調子を知るなりはなきぬ義と
いへば。いふまいくその方は。少どり甕古といふ物な
きば。そのまけもしるまじ。弟どもは京へのがり。さら
と師をとりての甕古。偽扱あきらかなれば。調子
をまきまへしまり。その方が調子亡國のしるし

君猶たるうへは。いろたるべからんとのやり合。何をやうて
何をしるしに。裁許もなりがたく。地獄も志ぐし案
じて居なひなるがいづき此上は甕古。偽来次第た
ぐし。明日に天にめいくの甕古筋を出立て出
ぐしとの沿りしこまりて。あへとも氣宿に帰りぬ。
甕古の日数はまくなられた。たるえは師匠を
たる物ゆへ。系統の巻物。師匠西域氏よりつたり
たまた。麩治はさし当つて。さし出すべき系巻
なく。いぐはせんと業じまづらんた。今さらんだのを
して出てかしひなぐ。是は法あしくやなりなんと。
いかくに工夫して。自弟に出つけまいかに。かまと
のうへの煤をとらせて。水にまぜてひきなれば。

いかさま古びたるまで。是こそと打よろこび。翌日
さうく双方地以へまゐり出たるとき。たる元ハ師
傳の出付とさし上たるに。麩治も一巻をさし上。
いさゝしかたの出付ハ。たる元かたのやうに。新規に
出たる物にてハなし。先祖代々の一通おそれながら。所
領下さるべしといへば。対をさいて一領めさるれば。
青木相傳の事。聖徳太子より此方。相續相違な
きものなり。然此志の青楽紛失義。これあるよし
かより所人所産して。いづかた迄も相傳所お。恵度
その明らめいたすべく。後日のため楽人請状。仍
くだんのごとし。兼久元年七月八日。麩屋治氣度
繰る。天智天皇判と。志りも判形ハ。其に麩治と

いふ古文字なれば。地以もことば明く。あきれたて
志りられもせず。あまりの事に志ばらく。志らけて
見へにたる。おのきうる作事を。とする所ハ。ふ屋な
きども。あまり文盲なる一通ふりきたくとする
ものにハあらず。女人立あひ筆策と。ふきくらぶ
べしとハ望む所と。舌と志めして吹あらせられば。
これきてまゐる志もなく。培のわかぬせんぎにかて。
すまざりなる折ふし。京都より松沢検校といふ
琴の上手くだりあれせたるとめされて。此ひちり
きを学せらきたるに。検校にてくまらひして。
学て居たりしが。いらに田舎なれば。とて。あきと
青ぶじやとまて。吹ものもふくものにきてなきを

ゆゑもお分と成る。其黒ハちゞくさ。綱子におゐて
ハ差別なし。女人のふるまゝ不ハ。京都などまてハ过
くへ立。飴賣ハ扨ハ曲手まり。なるまゞ芝居で
ふく。ちやるめらの綱子なり。煙紙も紙なれど。
ちり紙も紙なれど。たとへば京の示人のふく不が。
煙紙なれどもなるべし。せめて此女人がひちまき。ちり
紙まもわたれどよけまさ。その事をもなれたる者
謂太神示ハ鳥笛のうたが。たるかましなりいかま
言示をとりあつかはぬ不なれどとて。あのくらゐで
綱子のあらそひハ。人をたまけにしたる代と。後を
かくてまゝくだ地以職も。ふが笑ひになりて。今安
をとりなれど。わらそひをやめて。おめかり曲手まり

のおもよはかくなつ。綱子もあはぬひちまきを
吹て。もし人のふに感じたらば。粗末になるべ
きもしれずがたく。損角おやむなしと志からき
て立かり。すべてそのうなかえの藝ハ。正義なれ
ばまづか習ひ始て出よかり。其國に鶴鶴の横
為者多し。百日か二百日。乃至一年二年。其京
して師をとり。その師説悉く。覚へたりといふ
たぐぬ。たかたゆゑんすべからずとなん中上なる

㊂ 葉の名を云張二人固意地

鎌倉殿の門内に。安西の孫七郎といふ人あり。此人
の継持に兄内といふ者。主人孫七郎泉刀の門代

皮のがらまし時。件ものがりある日。非義な
まだとて。方で兄相に出るが。南の端といふ不
あて饅頭屋へたり。饅頭と云てら喰るが。殘
は何がどくも問たぞ。めたや七ツまへよりうれだ。
門鍍の門が志まると。爲いそぎかつらんとするを。
幸さいやくまんだらうの代と。たしふてござりま
せとつんだ。そこ不でありないと。出てゆくとそれ。
せといんだ。そこ不でありないと。出てゆくとそれ。
はさい年頃とおしとむる門ま。七ツの達きこへれ
だ。見内びつくりして。うる那つきまて。七ツとうて
だ主人まへいろうまた。身が主人は安西の添七
郎といふて。當時猿金屋のお奴。南北の御名
代といふすはうねども知つてあるべし。殘なるだ

又十文が六十文のうすまて。ひまがらせうらきぬれは
志ける腹。據悪なりがらし。不倫の鍍へかくらきぬ
からは。うぬらとなでござりまして。いてたしたら腹ナ
文字はうき切て。死ぬるより外はないと。柄は手
とうけてござしやけど。亭主はおそれてかぐこま
れれだ。毛不のおどもん〳〵おりうきれつて。
見はお奴根のが門志。年分なれた。さてが門お後
づくでござりまする。亭主をおきりなされて。お
まへのおもてなされませうよりは。何とぞおこち
のきなされて下されませい。見で門う筈とや
でござりませねた。おのきなさるて門路用まも
と。殘三貴文さし出せば。うぬらは見内をもとり

と思ふか。いよ〳〵かんにんぬりなしぞ。そのうへ亭
主めが命。三貫文ハやまい命ごとか。さあたへ出さ
なれ。こうさ一うちごとといふゆへ。又しく相談して云
貫文より。七貫文につけあげ。そうく金九文よ
でよまびかれた。中くきくぼき神にあらぞ。そ
ろく大肌脱になりていかまじ。家内のてあつか
ひ三十文といふ金子。耳をそろへてなるべかれだ。跡
ちらして。せめて又拾文ともぬかさんと。ぬきた
なまべき筆色と。どうなりたいうしませう程
にと。大ぜいうちかゝりて。さむる相子に柄かつきと
折て。竹光のつだりと。虫の入るかなしさハ。猶も
さろはなぞきもつかとめろた。そこらあたりところ

くと。こけありけれど。今までいきなひたる。兄内
にはたかにぐんなりとなりて。塩くとちからをうし
なひ。うねうへうちといふる。丑柄の正神をまん
付らせ。きのどくがる相子に。いづきもうなづさ
あひ。三十文の金も揚手へひけば。兄内ハおろび
ありく丸つぶ。砂にうづめきたるなどきなど。ひ
ろひあつ免せめて。銭二百文られらきよといふ。
いくへするものひとりも所く。合力じやといふそく。
銭百文まうしかれだ。いかゐおせ語と。礼といふ
ていうでき。かうしくそこをうちさりける。竹輿舁
などが藤人の恵をつける時。まけてゆけばよいに。
なぶりぞこなふて貸えふても。かうぬ時のごとく。

扨ハまけぎらいがねけてハ。あとへもさ紀へもゆかね
りのなり。是ほつけて京都に。あまり細うて。横に
たてねばたいらきねとて。蟹が迷子といふ不通
此ぞとりに和清和尚といふ人あり。此和尚の此に
むかしを江西。夜須といふ不に。ふたりの堅き地
者あり。他系八系といふなるが。八系がいふなる
風をひいた時ハ。陳皮に生姜をいきて。熱じ
のめばよいといへば。他系あざまちひて。陳皮とハ
あやまりなり。橘皮とこそいふべきれといふと。いや
く陳皮がよいとあらそふて。此あらそひおよそ百
日あまり。かたづかざりしが。その比業学に名を得
たる。松畏仙逵へ正さばやと。友人ともうけづくに

志て上京しなるに。仙逵先生ハ。他国へまねかれて
留主のよし。是非なく逗留して。ゆかれに雅波
よりのがりたる。仲村卓伯といふるが。和系づかひ
とのすね。ハ系のす。くわしうるべしとて。是ま
きもめさせてどちらでも。まけたる方より会指友
いだも。初来にさだめなるまく。友人ながらねけ
くに卓伯方へ。ひそかに行て会ひ友ぶ持系
し。一方からハ陳皮と。いふて下されよとたのめ
ば。一方からハ橘皮と。伯らきて下されませい
とのたのみ。友方ながらうけおきしが。翌日
になりて友人一度にまんまひて。たじめて来た
るていにもりてなし。私ハみかんの皮を。陳皮とや

松沢けんげう
やうむゆメ
おきれゐる
いよの国の
ぢさうむよく
せんぎまゐふ
わづこたる
ひちつまきの
わらそひ
ふやの作気
でんじものまき拘
せりわふ
まんぢうや
見せ

ほなのごけ
ふうぬの
さぶさすら
ほなの一すん
まうげん
さまろ
ぞうむおちの
ほたらむとるぬ

まゝれば。是なる男は。橘皮とやされまゝる。
是はいづきがようござりまゝるぞ。明日は信
きろされて。くごされませいといへば。卯伯きい
ていふを。此せり合は此左なれども。双方とのは
ようしからぬ。その子細は米の日は陳皮。長の日
は橘皮と此心なされよと。いてぞてよして奥
へ入られば。友人はあきれたて。弘友ぐての損す
なりなる。是も万方が家をもりて。まけ時を志
らざる者なりとぞ。此松清和尚まろかりしと紀。
を不なれば。ふと。菓沢象沢帛といふ。聖良を賞
きなるが。暁ても昏ても。此君はのこ心をつくし。
舞蓋衣裳より。内裳金までなす闕さぬ法ぐ

けやう。芳聖誘田の在紅紫を。一時に誘る心地
して。たまゐはなりなる者。象沢帛も弁の者と
ちがひ。大切にあいしらひ。和尚の望によりて。起
繞文をとりかけし。おさがひにいか根の姿にかた
るとも。老のしらがまでも。念志の所の紛来た
がふ者からぬ。うさせのなりひまて。万一意思へ至
ぐてまえ。志なによりて十年廿年。たよりを絶
すとも。仏中はかりまじと。その弁いやらしゐなす
づくしに志てしめ。此すをそむきとらぐ。天祿地祇
四大天王帝釈天の此罰。別してハ丹後国されと
の文殊を利がさつのさるをうけんと。血判をして
充かりしる一通。さがひに守籠におさめ。いよく

ふうき中となりたる。志りるは象次郎。紫墨一ぞ
いの忘ひいきまして。猿倉の芝居本より。かへしの
ぶりおりひよらぬ大金ゆへ。象次郎親方類に
は同のない男まで。さつそくまを打て。まもかり
くぐまを相談。和尚此よしきりまして。さぬぐまを
がねて見かへども。それ程の金子はそのひがた紀
ゆへ。よしや今まうるしたる。悪僧もおろ付猿倉へ
くぐり。かたらぬ回をしてしんと。涙ながらにまれけ
るに。象次郎はのり物にのりかけ駄荷
抱す笑ゝ歌。つゐに猿倉へくぐりたるが。和尚
もたやたまりまして還俗し。日条の床がそゆひ
の弟子となり。髪をゆひなるひ何とぞ。象次郎が

ぶんがうのつとまる程まと。精のいりしゆへまや。君
題のまゐいものを。およばぬかどにゆひなるひ。十
年こちて後いさしかの路金。腰につけてたるぐ
猿倉にくぐりぬ。さておちつゐて。芝居をしまゆ
けども。象次郎は出ぬ。是はどうしたるすと。こ
ぐんの不行まて出て見れた。その拍子花は出
もおよばぬ。かげこそびこまもないといふゆへ。たて
がそんのゆかぬとはおもひながら。それなりにしく
逐電する。宿は猿倉一番の酒屋まで。金銀の山
をなす身上。此家の手代に。志るべありてかくり
居たるが。此酒屋の亭主は相たて。後家の身祈
ちとふけはしこれた。まづはよいさりやうといふ也。

大系馬蝦夷噺　四之巻

目録

第一　若鼠乃切程さハ奴卿良其界
後家の心又ぞいよ〻つて見る抱
寝みだれ髪れいこづら仲間

第二　本食乃意の役とハ不審紙
たり合て居る侍望かなしかな
たるそらに云利のつよハ沿論儀

第三　不化乃僧の旅衣ゞあられた孤福
九葉のもやるあこかを山の蔵ぞ旦を
月夜に桃燒外宇の女殘る仕合

一　前荒乃功程さは奴雅良の男
桃の日ひし情を思ひとろへく愛ハ。和尚還俗しく
清風のとあらふ先てよりかゝ迄なれ大衆祥。へまうやま
ゐるゝのむりし此和尚乃ゆらゐまあらば。俗あして人ま
うやまもろしと。俗ありて人ようやまもろし花惱とうん
ぶるゝ。俗は法の施ハ在あく。俗ハ賊を施すへなり。
法は以先あくを先た賊は無ゝ如此出さるべからず。
俗よりハ俗を法の且ぬといひ。俗よりハ俗の賊乃且ぬと
いふ且ぬあゝ施といふて法ぞこそるなり。法の施しハ
法のよそ名きへく。金銀賊宝出しあくいものをかど
こそゆへ。俗の俗より且ぬといふ名ハ立兒居ざる兒立も。

知りたるなりけれど和尚の時とはちがひ。雲水黄金の
光りたるくとてらさまはるゆへ。縁会中にさまはしらぬ
人もなりきあるは表の方より蝶中せうとぞ十計なる
維持こんの部とへ物をやまそこをくが取ひけかう鮮なる
のりにぬりたる黒も。まぶるし雅まつらかなる顔色。麗を
六の湯までかしあて。華洗の汗手まれの大小。二なそ
ろへて武百みよりこは見へぬ。ぞまうしござつことも手代
たかれぬまだいや是れ此主人は。お月にさへ出ばれ
の若でおざるのがまぬ中のおざりをまをまぞまざく
糸いさといふて下さまたのをゆこといふ。手代は酒へ入
その遊りいふ也へ隣子のがりのぞいて見れば。もめんふん
どしもそばさうを一入らしく。縁頃の夜に似られども。

まりのまはめまさめこそ。ふとせいらう屋しそふなをてろ
屋いぬなれども。ぱまさのかくろむうしにかちらぬ。かゝる
がりし。菓沢家次郎なり。是はとおひしがいやく今は
家のあるじと。ぬくて。所はだあのやうなものに一りんでも
あると思はれたは浴りごとしと。手代は此ことを主人は
をまく糸らまし中ゆいはせられた。奴のこゝ取ぬかは
まくいや。間にかしらいでもあらまし。おのくへ中屋いおいざ
弓笥にあづかるべいと。底くあがり。是の所主人は拙者めと
ふかい中にてたがゐにまれたるしる記清文ありいかにいる
してをはざ取にぬくはいらぬものなまはば。此記清文と
賣やうはいやとやさるとも。お代官所へ所出て。此記
清文の文句の遊りやうそく。頼ぶなんとごといへば。手

帳箱

伐左衛門がくちへ移るとも。店さきやうましきぞめへつらく
がり金売物の二歩まくべくなりしだといひうぬのうちで。唐つら
店が命かけるは一番。身体柱を敷しての。此家城まゝ子も
思へども夫へむりしの色がさめて。浮びの案ちうでまんねん
つ氣のどくさ。今百度と少金子なくてでは愛がるし。但文かく
ねんかかるべ。身がこゝに見へそのうき迄そうちで。身をまいるとこそ御。
店さき何にしもとけられぬ程の人だかり。清兵衛は外聞の氣の
毒さ。目録は伐のとおそれしゆやふにと奥へとぶく。取りに立ちうる
いてにしてとららるべ。扱さむいうしの腰元と深く悋氣の者た
むりし今は命。わのてのれ奴よ伐の悋氣ともいへどもさしよいう
へなりし。店のをやしゑくうす浸りつくく宝手代どそうらう面を
りとへ今さぬと云へで出。ふ抽が浸楼じやとの浩ひしき。伐のとがが

かうろうぞと清兵衛が縁子まかせて今ねうりくとて。深切なうり
と云々迄て跡がみよ龍ゆえ合せやア、おまへは和尚様でござ
つまするかといふ。我がむ三が少しとわけこひをそそよそつき。
おまへはさ而ぬはござりませぬといふのめぐ、扱まあせいで。さあせん
つくの様でござりとぞいひつゝとの主やとつかりしめさんとかりしや。
是も手隙く、指子がござりますると。やかて深く盃をもれて。なる
しゃ身がなるとく願ひして。其だ清兵衛の一念んがそんほこのだ。
これはれ、べさひぜんよりのせり合ひ、身内がまでは腰ひはくあまたいへ
らがりしかうしてるたでかるは前へ立ち来もせぬはそんべの奥にいつよ
つかくふれたくなりましの時は芝居とのうずかうしが寛者よい
わけしてきこ家の後家は高の外道芝居めく うたうしを
めいてえられるれどもとひ出し、見るも思へられしが思ひやめかて

六十七年來娘が宿より來ぬりの。まつの者でハ色が立ッとてこゝろく
おぼしよきこがふ西へ別して經も聞こまりことゝいふより家内よ
男ごもらる者女ハ人いづ也もいふらいとぬるでこそあれ。まゝ
なれ者ハなく清風の我身ゆもれのこなくなりくさそへいふんさ
でしこんごめくハなりしと。奥城さあをむりなり

(二) 未食乃意の使とハ不審紙

延暦乃むりし梅所三位のつ。源倉へ以下向あるんとて。京
のうちへ家帯に雲関へ行笠を忘し。烏乃附子源の夜かけ
る源來りて。ぢうりながらハ以前家中に。信く源八役とかゝ侍氣
がごとうハ。知そうよ。お目よりいつまでハといふ西へ雲関義を無り
いひつぎるるよ。和模の侍信く源八所ゆれば何とぞ以門外へ
出くるまれよとあれば源八何とやるんなりとなく。いやく以用あるべ

是わがられよといふ。ゆゑ信なくこれ式輩まで。かりてもこれよと
いふ者いかながらもいふおりる一家中の人とあまり合点のゆゑ
るまく次の号れ連子よりも。立おわひてのぞきられ。たきくとハ
家へがこし。彼律儒小声に家潤成うへくふとこゝろりみを
出し源八ゆ激をと。清気まじきと押れどもぜひともと激せど
押へ以ゆへいふ所く律儒ハ門外へ立出ゆりたり。源八もまが
新風へ入れば侍輩いづ也も立おわひて沢をさへ尾ゆく彼よ
立ぬ義とてあるへば。熟なる者尾ゝろて問あれば。これハ思ひとも
ゝらぬるゆゑ。又東遊よ春日風といふ美なる酒風ありて。
今夜庫にこゝろ入れ男子ニ也なり。貴くよりけ風変あること
持て。人も志るゝ家なるよ。こゝひとり寝ことし十八年。志らも
美人の家へあるが。女現寵愛のあまりよ。いかれる者にても寝が

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中復して三人を殺し。其毎俾儀して見るに。ひんが雲霧成
源をすゝめ出もあるべし。人を見て酒屋の娘がなりしに成婚をとへ
あまり好逸なる為仮合。ゆゑ其ハ和勢がなりて。あやうしとのすゝ
みさゝめり。其月出ハと成あつけりちゞめ。ゆゑこと嫁に。其ゆゑと見往
れ遠なるゆゑ。ゆゑこまりよとなぎるまをまいとぞ中上ゆる

三　西化乃僧の旅衣ゆゑあれば狐福

孫舎藤が谷万年精舎の寄僧勤源といへ。家ハ学問に志ずり
能化をなじ。其ゆゑ身を立てあるゝ。色をこのむるゆゑ人をなして。奴情
ぐるひの沙汰やむるゆゑ。孫舎成追出され。丹波国に志ずゝ。お道
だとて。ちかぐのぞる西舎とてもすゝづ或当の身立るべと。
朝に寝揚に夏なりしとて。其ゆゑ三鳴の宿にあり。其ゆゑ三鳴
一夏の身立りしへ。江戸の身立といふ者。元文の年忌にあたり。

旅僧成見かけ沙汰まゐる入。浮去あれば法苑ゆゑ八家九家
入おきて。思ひくの理念佛。勤源も無りゆゑ。此所にと
められ法苑をつとめ見れば。食式百疋といふ袍物をあたへたり。
路金なりなりしゆゑ大きなる嬉しく。見をふ金とも粗く。
禁物ゆゑ。気立出るが。江戸宮も思ひぬ内にさゝとも明くつ
く。ゆゑ月の道見れば。そこに道遣をまりけるに。栗も八
けとおぼしき。ゆゑ。くとゆりおこをとのあり。これなるんとふり
あそのいて見れば十八九なる女白き面をうこを忘く。私ハ丹波
氷上郡兎野村の大百姓。伊左衛門とゆゑ者の娘なるが。入聟
をとりて家整をつぶしてもそこに藤村より。たのこをとれたる
所に。其代表家にとゆゑ者と称ひどろいて。今年三百歳盗出
し。表家にと法道立。矢藤役せしが。此宿までゐ道をさたり。

法也て御ゆ也ゆ子細があるとて。此辻堂ゆくさ殺し。此松
数のもとへうづみ並てうつ。此落し方浪宮めて夜秋ゆゆへ
とおぼしめさんが。此御法しめさぶとこしへふびんゆもおぼめしく。
御めくみもうれうぐ思し。かまへ御ゆ丹波へかりといふ。くさ
葉の法ゆくらくそんじくるな。是まであるを也出てるなり。
此ふんざしは無人の役とかゝ世てゆされし物なれば是を志るしよ
御持氣なされ御さ也下よとさめぐと打忘れていへば勅法あ
ち也は思ひ。いかゆも出家お庭の役なれば。ちらくゆ無ぎべし
とうの御んざし法れて。物もふしぎと思ふ間よ。家は法の
ぐとあまよけり。それなり家御月よりゆぐ丹丸へくだり。
氷之那御さがしやうくと。作左衛門方へ為あらう。右の如子をとる
ゆゑ御んざしと復し乃也。作左衛門夫婦は涙も世界あへぎ。是と

ゆゑも一ゑ為ゆゑ宿執なるべし。其死骸を此株にうし。我左衛門め
と為出し。娘が御死をとりゆさんまづ志ぐらゝは追返と
さ毎くよりてなし。夫婦お疲しけるは。娘がよくくの縁なれば
こそおの御御報こそれば御目。これはやるものなけ也。遂法
さ世て家賀御ゆづるべしとそ也より目夜すゝめて。そ御く
髪をのぞさ世ける。勅法も大身神をしてやるなり。
のことを髪は山法のやうにかぐしらの女ばう持てたのしまん
と思ひけるが。源念表あまり。藤株よしてのがれられ。ひとこ
ゑ思ひ給ふ。人のおくいゆゑやうにいこしと。是は夜秋を
ゆゑ思ひ。信金なりどうたりとぎゆし。あらるべしと。今三百夜
復しのりゆゑくそ代下男一荷をさみ給もあらうしこそ
とる世。其身は妻御ゆいて黒羽二重の役付の羽織根指

胆中のつぢぐう
女のゆうぎいくりんすのよんざりーとまこさ
くりんぎいめをさまし
きもつぶさ

何とかくさいやうまて所波を立ちり日数程なく三陸を立ち
おうとのがる時金二百疋がりてありて此中ひつがなくのがりて
るのかれたの江戸の才三郎月下りて酒田りんとのりあらそ
間くたいまでは出門の者たぶしぎさうに見る程にが浪のかりし
しゆへからめと異くと残り亭主更姫まあひ見たりしといふ
ゆへ其出までは勤務は先の所にて百日計も此お客えに酒
ち神絶さうく二百疋下さまし金子をもつて制楽なく西
えく来りし所にはさうか仮ありて立身の還活はこしたり。
お月の四礼中さん宛是まで来ちうといへば亭主ふし
ぎさうに其お親が年長を伝へしいかくいのる所り。
あなたの客えを立まし人をのみ此物なるに百日計とは
がてんと来らぬ。そこをそこのとの所しはりかりかうもいへまとふく

ござるは何でござるぞ。海の藻ではないとはれくそろとこそ
づきしより相撲と見へしは神る者ゆしてさ夜ぐの海者
と身にまとひ重要三がうと表に得せしが代とのり物を
為さまれば。かげも此こちを所し。板は辻堂に得るよりのちは。
皆猟の所為なりけるうと。亀は法也たうとりひかんと取く
たちひなくころりとこけて得れば亭主情ふかれ若ふくさ夜
ぐ女抱とかへ六七日の後西所残るくおりつかせしとなん。
整猟の妖狐なるまゝ何の所謂ぞや。理をもつていはゞあるま
じきなれば天地限りなれば物なれば限り理ぜんさく
ゆくはゆくべからず。勤務はそれより本分になりて。たゞ
へ為りけるぞ。これはひふしあんび。俺とそ猟に出あひけり
かう取る来月をいふなかとおそこからもひとりおうもひと

ゆまと隠て庵人重り。左衛のおがへかといふ程。かくしかされ
ても隠れがかいと。たゞいて軌むより是非なく。せと流布の事
番外とあらせて。女ゆゑ入て百文げに書るよいかりはむさう
業と。此事からいはれ。左衛より私無し。所ごんとゆゑいとのよう。
雑集に。実は来り。蓄ふい渡といへ。左衛に入迄。所のとさせて
もさまいの門立。さへど。目こゑ。これこれ三百世文はあまり。我は
志らぬるかがらかかりれのおかげさかと。他のうちは少社成立
てお礼をかせば。やまいかり夫婦の動語所にお貌かされていとい。お貌
がおしゆゑとこゝろはいさゝかもおひよらぬ義だから。所法してだらこ
くと。俄も者と。如ゝ。数じてせるのゝ。大がいはやうかゆゑて。
お人のおらぬ家妙を。外より法ゆゑて来るゆへ。物のさまに。家が
ふさまは。お人もそまにしておく。根のこゝ変し。動語も。軌は

だかされしをもつて見れば。無事なれたそのうち。宮紙ゆゑ。
事なり。宮紙実ゆゑ。かうしかふ。ゆゑ。今よりちゞめぬる事
かがらかゆゑもかるべきなりとおる。智者の中侍りぬ

四之巻終

▲扨ハ所中上まする

朗六が破弾椒が極力の奥も月日に籠竿
并分より照れ古吏が云ハ誓紙の筆先も 宮思
娘 楠 奴情太平記 全部五巻
荻伴が破笠楠が計畧の金も漆川に討死
付り 仏より貞に辛至が一戦ハ身代の矢切も 廓通

右之本正月二日ゟ本出し 壬申ゟ此ハ求ハ覚マラ作

大系圖蝦夷記　五之巻

目録

第一
金山ゆきほり出し女房
かたれ討とはいはく千万詞
そのへ立てあれると使奴留略

第二　やはら取も無念乃揚屋
長刀袋つかひぞこなふさ女の繪
かさまゆく恥乃かはみや浴人

第三　いづなの妙術先ハ不思議
契情主さまぐまゆ御姿
かぐらまゆてめかへ給ふ春風

一　金山ゆもかり出し女房

物ハ所ゆ人ハ友によるとかや。金山浴山サク先をかくといふ
浴のゆざやうさ。第一湯風呂ゆさそく人をいるゆ。金山方へ礼金
多く出して二朝でも三朝でも。湯屋を立てるゆ所り。常の湯
屋ハ浴人より銭を出せ先。金山の湯屋ハ浴人へ。湯屋の方
より礼をしているゆゆり。家ゆ九刀浦里山のゆざをひ。金
銀の蔓かりあたりたる妖び。湯屋も又所ゆ立ならべたり。下麾
といふハ去ゆく。堀へく金銀の没。たんくほりぬいて所故
毒氣所ゆ出して。先生をするためしかし。凡夫数ありてたん
くと漢出ぶお喝ゆく。死をするよさをめたる獄ゆ人。栄趣ゆ
清くさせ。死ぐゆ拙女ゆ。酒肴の商人おびたゞ出ゆ

けとひ。金銀をそくのもうとき故思ひ出のあるやうに仕かけたる
物ありごゆんくに嘆がいづるとも見ん倍きたるめ。女房は夫とお別
ぐくゆく後夫を持ば後連と夫婦して先の夫死ねる迄。やし
ばひ外抱して。ゑん所にあるの沢貧かりゆくだとへどうしかれ
裏須よ。よりの表は後夫にて表は為れ代裏は。又後までも
とこゆるどく。女房は一人ゆく。夫は又お人ひとせんぐりに。隠居する
るよりれん。根下麿たあらゝめ所にかく。金銀を此味する故持く
出るまはあるこれ。和尚などに金銀の粉をまぜて。身うちに
ぬりよぞ出てるてはゆくあらゝめ所出。そぐに湯屋ゆく時。
湯屋の亭主入口に居て其渝の貧乏を見へ入に来る
者の机をぬがせ。貧乏にてあそげて見て。金を歩と残三百文やり
ませうとゆへだ。それはあまりなるまや。西口の湯屋で二歩三百文と

いふこと。家さうに家へ来たこと。さてとあそげて見て。西鉢めされと
いふ時。まいもどあらゝむかしやれと。又へ念入所にこそ来て見
て。三歩に西が明り。居風呂へ入やいなや。嬢も嬢も家内が出
いて。縄のくりこうが持て来く。身内をこそ来あひ。そぐにそ
湯鉢居させて。三歩を挽屋に沢こゝる。ちがゆりて金をとる
るゝ。中あがりの時。二汁又菜の料理鉢ゆ。又今一風呂へて
此後はさのこそげぞ。あくまた又菜といふ下麿。れとは浪人ものく
よしなれども。世にあらて此山にさぐまり。山中の功者ぶんと
明りたるが。浅湯より帰りこゆんくと嘆出したれば。女房かぎん
明りたれ。後夫をとらこざれだ。又菜をやしなふ事明らぜ。ぜひ
なく後夫を持思案なりたるが。懐狐の子はたゞ菜流し。身
一つにせまる事なしさ。やるうこなりたるに此山くいりこむ小る物

壹人の先八といふ男。浪人者なりしが。此女郎見そめて。恋なれども
叓あ也ハ心に任せず。思ひつゝしてをごしけるに。後まを務る
よし。是さいはゝと。縁ゆかしめ。下麾の獄へのぞこにおゝぶ。小当抱
あさあひあく。お嬢に世ゆ浴るべしと。家へをしる程云の歌。奥
の当ゆへおかんくと。嘆ばしひ。扨ハ此及びし。先夫よりと合忌
蓋をこそ祥んとする時。女房いふやう。私ゆ親の歌ありそれを祥
らふ当ゆ山に入こゝろ。先夫ハ此次を断しをいひ
助き力を軽重なり。尤其家及とても武士の浪人気と申し故。軽く
ぞんじ。後夫と軽むるゝハ。ちからゆ。女ハ下さんせと。又ぞ先八のつて
の事におどろき。其義なるゝハ夫婦ゆへ。扨ハ恋ひからぬ
義と。行をつぶしうるけしき。女房も案の事あく。お侍のそそと
申しゆ人大事を打明て口かしいゆへ。沙汰せう也。てハ本望の義なげと

なる仙人逝さぬぞと。つゞらより出さしめ出して。切て出ハ先八
死きり。奴程のこゝろんぞ合忌いてしこゝろをてハ女中ゆへめづらす
いゆのこゝろかどろきのましこ。先ハ後さぬといふ事ハ拙者が
助き力せぬといふ訳を申。此さう拙者が此ハ所及大括と申せしか
西国才に生ゑし。奴郷の遺恨によつて。侍業豊原老後と
者に討也。老後ハ老場より立さつて行才を見ぞ。隠し付祥しふ
事に此山中にまぎ也。居ると此出して小当抱愛と女へこゝろ。
是によつて。事の助き力がなしぬといふ義。隠をるの打明をせらる。
たがゆの義と思しめせ。さらぞといふく出くゆんとする。奥の
当よりこれんくの嘆と。但に先八及志ゆらくゝ。かほまへの合兄
所及大括及を老脇松原にて二三当ゆりをおして。志のりかゆて
討く立のさし。豊原老後とかほまへがゆの美及ハ幼年より此

ゆめされて是まりはあるまじ。是なる女が親の歌といふは。今山の大
原大村右門中く女のまゝ及ばぬと思ひ。夫と頼む者の秘めよう。
助言の鈎米。身もいかゆもと頼まれしが。如く頼んだ頼なれ身。
一旦頼まれた限。立てやりたいが者の義士氣。すゝよりて身をうち。
夫及の本身の延しくるゝ。女が頼ひなくてやりてきたといへば。
此ハ龍城志らぬ。今出せしハ偽りゆく。身が兄の付出といふるハ
なりなく尚往まうなりは。浮かりていひしゆゑなるよ。バテがそんのおぬ
るといへば。たゞ又二乗大きさまゝ。ひいかゆも無事なまへ。笠原ゆて
も是後ゆくも所し。女房が頼をなぜ兄の歌ありとハよのぬけなと
思ひ。今のやうにいふるハ。雪偽りをあらはさん為といへば。女房も同じ
事ゆく性根のさらぬ人なれば。先夫を年なふ所にしは
公が立ぶ。その入聟ゆてハ先夫たゞ二乗及と。所に住てのつきあひ。

よからふやうが此ハ少人。武士氣のある人かなり人とも。見ん為でご
ざつて。親の歌乃立といふも偽りまゝ出てゆりめと厚ゆるさなん

(二) やちら夜も雲会の揚屋

勢ひも濃ゆも出ぎとうや。繰会七里が拙よ。大都要去夫と
いふ奴郷者ありゆるさまうさ言ふ出かけて。勢ひをする男なり
しが。拙ゆをまらぬといふものなりゆゑ出ハきゆく。何ぞいふゆも
七分ばかりさをかけていひけ出ば。人も是をしくはやうゆゑ。あるゆ
稱んどろなる。拙思た猿といふ浪人の才へ。無き夫出ハ浪る時。
此中ハ夜沢へ振舞ゆゑ。ある及。かゝ見舞ゆさなんぞあの才れ出
いさしてゆせませうと。いふより又是ハいつもの無り。七分も八ぶもうそ
であらんと面白ゆゑ。稱たいやたいは出ぞ。七出ハ今を才門若男で
ごさりことといへば。ざさ出ぞ。夜沢く無りされば振舞の亭主ハ夜

くハーや
おどろく
女郎
こまりて
ゑげる
其ハ
おげや
わだれて
ゑれる
先ハおりい
為ぶりじや

いづなそ女郎の
まぐことがきと
おもふてゐる
を放みまさら
けいせいのまさを
入てゐるひゐふ
いづなの剃ゐら
さまの為中する
おそだの
行れ入て
ゐるふ

寛保三癸亥正月吉日

八文字屋八左衛門板